「『主体的・対話的で深い学び』を実現するための実践研究事業」教材研究会レポート　No.6

高知市立潮江東小学校　教材研究会

平成３０年８月１日（水）

国語科　第１学年「サラダでげんき」　彼末　りさ　教諭

授業改善には不断の教材研究が必要であると言われています。本教材研究会では、教材との関わり方を問い直し、授業づくりの基本を見つめていきます。
子供の学びの求めに応えるためには、教師が自らの指導を問い直し、自己更新していくことが大切です。教科の価値やよさを実感できる授業をともに描いていきませんか。

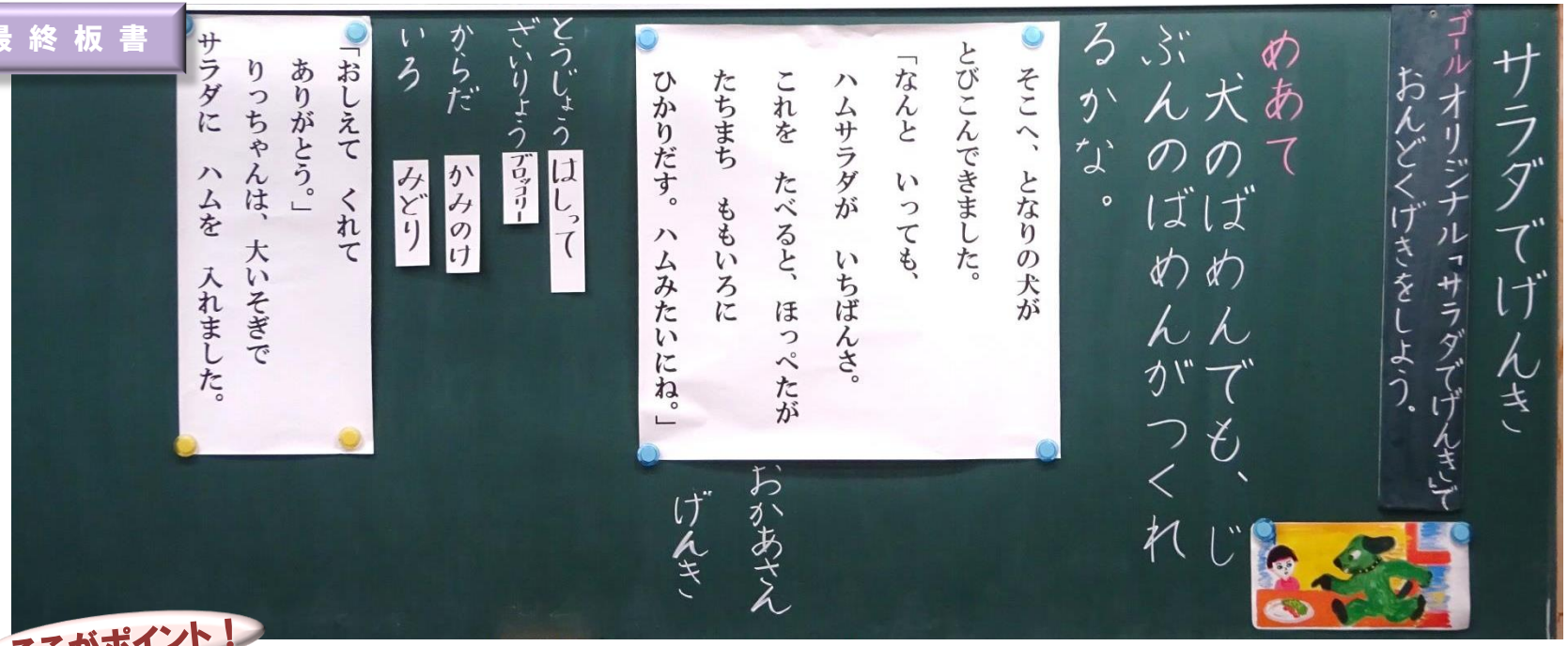
本時の目標

犬の場面の書き方のポイントを使って、自分が登場する場面の劇をつくることができる。

授業の視点

だれがどんなことをしたのかを考えながら、想像を広げて場面ごとに読む力を養いたい。

最終板書



ここがポイント！

「能力とは何か」という問いに応えられるよう、学校全体で子供たちに身に付けさせたい能力を共有することが大切です。
「読むこと」の領域で身に付けさせたい能力は、四つあります。一つ目は、文章がもっている構造と内容を把握する力です。二つ目は、文章のどこにこだわりをもつか、そして自分なりに人物の行動の様子を想像する力です。三つ目は、自分の考えを形成する力です。四つ目は、感じたことや分かったことを共有することで、自分の何が変化したのか、自己の変容を自覚化し、自らの考えを再構築する力です。
また、単元というのは言い換えると、“見方・考え方を鍛えていくプロセス”です。すなわち、もともと子供たちの中に潜在化している“見方・考え方”をいかに顕在化させて、それを成長させていく単元を描くかがポイントとなります。

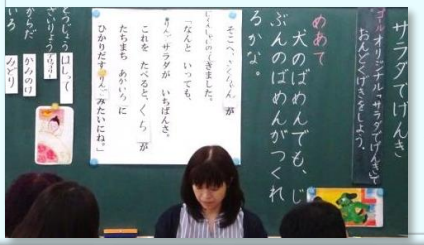
協議の視点

＊言葉と言葉のつながりに気付かせ、それを使って自分が登場する場面をつくることができるような発問・手立てになっていたか。
＊読みながら、創作しながら「読むこと」の学習を行うように立てた単元計画はどうであったか。

模擬授業リフレクション

模擬授業後の協議では、「『体のどこが何色に光るのか』ということと、『食べ物』の整合性について、この物語のしかけを子供たちが理解したうえで、考えられるだろうか。」「読みながら創りながら“質”が上がっていくことに、子供が気付いていくことが大事ではないか。そうすると、言葉と言葉のつながりが、前の時間と何が違っているのか、どこに新しい学びが子供の言葉としてあるのか、子供たちが自覚する必要があるのではないか。」「『音読』と『読解』を欲張るとどちらもできない場合がある。だから『読解』に軸足を置いてやるといいのではないか。」などの意見が出されました。

自己の変容をいかに自覚化させるか



本時では、前時の文章よりもいい文章を書けるようにすることが大切です。つまり賢くなったレベルや部分は、子供によって違いますが、“昨日の自分より、こんなに上手い表現ができるようになった”という子供にするということです。

そのためには、今日の場面のどこに目を付ければ、自分らしい場面になるのか、文章へのこだわりをもち、自分なりに人物の行動の様子を想像し、「あの犬が言っていることよりも、自分はすごいことを言いたい。」と、子供たちが思うようにすることが重要です。

“問い”は子供の学びの“推進力”

“問い”無き中では、子供は自ら学んでいるとは言えません。

今日の「めあて」は、「…自分の場面がつくれるかな。」でしたが、この活動を支えるものとして、どういうものがあったらいいのでしょうか。つまり、「この表現では物足りない。」「その表現は、変えてみた方がいいのではないかな。」など、子供自身がこの文章を直してみたくなる動機が必要となります。

教科書教材は、この教材を書いた人の立場で書かれています。しかし、“もし自分が書く立場になったら”ということを「めあて」にプラスαをしてあげるだけで、子供の動きは変わってきます。

すなわち、教材文の構造を習いながら、自分だったらこれをどのように“自分の思い”という形で変えていくか、子供が自ら学びを推し進めていく“問い”が大切となります。それが学びの推進力となります。

模擬授業から見えてきたこと

たくさんの意見をありがとうございました。

＊「となりの犬」の場面を生かして、自分の場面を書きたいと思える課題づくりをする。

＊ことば遊びに終わらせないように書いたものを子供自身の言葉で説明できるように、子供の発言をつないでいく。

これらのことを大切にしながら、授業を行っていきたいと思います。

彼末　りさ　教諭

参加者の声

- 「見方・考え方」を板書として残しておくという点が勉強になりました。児童が学習の過程で、何につまずき、何を手掛かりに「納得解」に向かったのかを見える形で残していくという点はできていなかったので、これからこれを視野に入れて改善していきたいです。
- 「子供に付けたい力」をはっきりとさせ、子供たちの好奇心をくすぐるような“問い”を投げかけることや「見方・考え方」が深まった発言を逃さず可視化し、価値付けることが私たちの役割だと思いました。国語では特に、子供に自分らしい表現、「納得解」を見つけさせ、成長実感を味わわせたいと思いました。
- 潜在的な「見方・考え方」を顕在化させるという言葉が印象的でした。各領域の中で、まず、能力が何なのかを明確にするということは、さらに大切にしたいと感じました。

check！　子供の期待に応える学びをともにつくりませんか　受付 13:10

次回　平成 30 年9月 13 日（木）　授業研究会　13:40 から　1 年「サラダでげんき」